

【論文】

上海 東亜同文書院における医療環境の変化

愛知大学名誉教授（地理学）、愛知大学東亜同文書院大学記念センター・元センター長 藤田 佳久

1. はじめに

本稿は、1901年、上海にビジネススクールとして開設された東亜同文書院における学生たちの寮環境について、その実態とその変化について明らかにしようとしたものである。

20世紀前半期の清国は、清朝から民国への政権変化、つづく国内内戦、列強支配下でのナショナリズムの初めての発現、後半期の日中関係の摩擦など、激動の時代と言えた。しかし、そのような中、東亜同文書院は1945年の終戦時まで、一時帰国はあったものの上海に存続した。列強が中国各地に設立したミッション系スクールは、民国期後半の時期に広がった教育権回収運動の中でほとんどが撤退するが、東亜同文書院へはそのような動きはなく、存続した。その背景には、東亜同文書院開設時の日清協調を踏まえた開設についての清国側からの承認があったためといえる。半世紀にわたる東亜同文書院（以下、書院）は卒業生が約5000人を数えた。その書院生たちの最大の行事は、中国のメインランドから満州、東南アジアへの大旅行であった。2～6人単位で自分たちでの計画と調査研究目的で踏査旅行を実施し、未知の世界へのまさに大冒険旅行を行ったが、厳しい旅先の環境の中、若干の現地での病死はあったが、旅行

そのものによる死者は出なかった。

しかし、3～4年間の在学中にはいろいろな病気に罹患し、特に前半期には学業半ばで倒れる書院生がかなり見られた。その背景には、上海の持つ風土性が日本から来た書院生に合わなかったり、上海及び書院側の医療環境の未整備による要因などが重なったことがあった。前半期は学外の大旅行中よりも、学内にいるほうが大げさに言えば危険だったのである。ではどのように危険だったのか、それをいくつかの記録から確認することからみてみよう。

2. 上海の衛生状況基盤

(1) 低湿地

周知のごとく、上海はアヘン戦争により勝利したイギリスにより1842年開港された。それまでは今日「城内」と称される壁に囲まれた小さな漁村集落であった。その起源は13世紀あたりとされる。

この一帯は長江右岸の沖積低地で、その堆積により右岸側に閉じ込められた沖積低湿地で、この一帯を流下する小河川の末端が東シナ海沿岸に形成された浜堤によって滞留滞水し、黄浦江がラグーン（潟湖）として湖状に形成された（図1）。そしてその後の長江の大洪水によって黄浦江の北の先端とつながり、黄浦江は長江、そして東シ

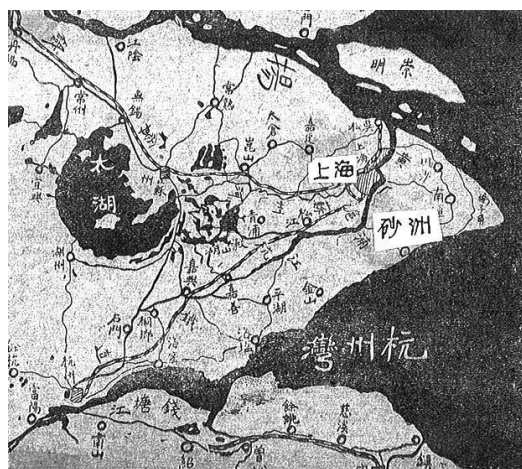


図1 砂州の後背地潟湖状地形に立地した上海
ナ海とつながった。

イギリスは、東シナ海の潮汐、干満差が大きいことから、海岸には港が造れないことを知り、イギリスのドックランド¹と同様な機能を持つ内陸の黄浦江に着目し、上海集落の外側に租界を設け、貿易港としてここを開発したのである。そのあとにフランス、さらにアメリカもここへ進出し、国際港の様相を呈することになっていった。当初は列強からの移住人口もわずかな時期で、長髪賊が侵入したことがあったが、そのあとの義和団の乱では、危害を恐れた多くの難民たちが列強の拠点である上海に救いを求めて殺到し、陸上から海上一帯にかけて、人口 50 万人が集中した。その乱の終結により、出身地へ戻る難民たちの動きもあったが、租界の外側の低湿地に粗雑な住まいを建てて住みつく人々も多く、列強の租界側はその受け入れに領域の拡大の要求を余儀なくされ、19 世紀後半も混乱がつづいた。これが上海の低湿地上の都市形成の始まりであった。しかし、当時、黄浦江沿いに建てられた列強による石づくりの商館の中にはその重量のために軟弱地盤の 1 階部分が地面へ埋没してしまうケースもみられた。

書院の前身である日清貿易研究所は、その過程の時期の 1890 年に、イギリスにより新設された上海競馬場近くに開設された。いずれもベースは低湿地であった。また、1901 年に開設された最初の書院は租界の南方の黄浦江の左岸側の高昌廟に建物を借りて立地した。隣に清国最大の江南軍事兵器工場があり、付近は農村で、集落や農家が点在し始めた一帯であった。ここも低湿地の一角であることから免れなかった。

(2) 気候

もう一つのベースは気候の特性であった。図2は当時の 30 年間余りの気温観測データから、月別最高気温の平均温度と月別最低気温の平均気温の変化を作成し示したものである。上海は中国メインランドの東端に位置しており、西日本に近似している。同図からもわかるように上海の最高気温についての平均気温と最低気温についての平均気温とは、きわめて並行的に変化し、季節の差は大きい。夏と冬の差が大きいということである。夏の平均最高気温は、一

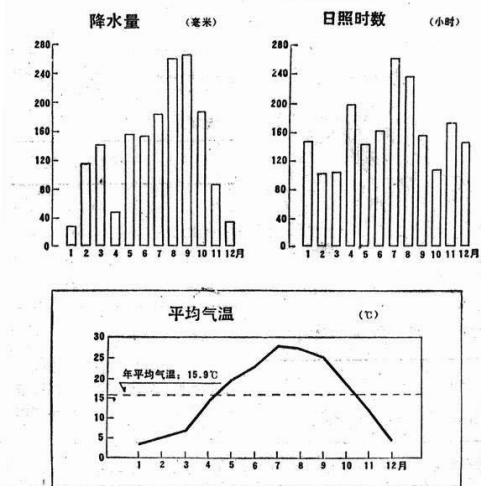


図2 上海における降水量、日照時間、平均気温の月別変化 (1985 年) (『上海統計年鑑』より)

般に中国では7月がピークであるがここでは8月との間に差が見られない。実際の個別の最高気温は8月が39.4度であるのに対し、7月が38.9度であり、日本に似ている。上海は島国ではないが半分近く海に面しており、その点が日本に近似していて、7、8月は猛暑の季節といえる。一方、最低気温では1月は零下5.6度、2月には零下12.1度も記録され、大雪の降った記録もある。このあたりに海洋に面しているとはいえ、大陸の一部であり、往々にして大陸高気圧の冷気を北西側から思いきり受けやすいことがあることを示している。

なお、降水量は1600ミリ前後で、日本の太平洋岸にある東海地方に近い。しかし、蒸発量は1400ミリ前後²で、湿気が上回る。とくに夏は高温多湿で、湿度がかなり高いといえる。また、1980年代のデータでは、降雨日数は140日ほどあり、それが2、3、10月の日照時間を100時間ほどに少なくしている³。

3. 当時の上海における衛生実態

(1) 日本人による記録

ではそのような中での衛生環境はどのような形で顕在化していたのか。もちろん、前述の衛生基盤は舞台であって、病気などの健康問題はそれらに依拠しつつ、人間社会のシステムのレベルがそれらと相互に規定していることは間違いない。そのさい、当時の急激に人口集中が見られた上海の、租界と租界外という2種類の都市空間の入り混じった状況は、それをより複雑な状況にした。

そんな時期の中で、日本人の手になる『上海案内』⁴という上海紹介書が連綿として出

版されたのは参考になる。日本人が次第に上海へ来住したり、観光客で訪れるようになったことがその出版の背景にある。今手元にあるのはその11版で昭和2年刊。第1版は大正1年で、以降ほぼ毎年出版されている。その中に「衛生」についての紹介記事があり、当時の衛生実情を素直に伝えている。その一部を現代文風にして示すと次のようになる。

「上海の衛生状況は感染病患者の多い点に特徴がある。特に、しょう紅熱、痘瘡、麻疹、流感、マラリア、コレラ、ペスト、などが多く、その全患者数は人口比で日本の4～6倍もある。伝染病による死亡者数も日本の5倍と多い。租界を管理する工部局衛生課は、常に衛生吏員を租界内に巡回させ、衛生知識のない支那人の伝染病死者発見に努めさせ、それを居留地内の開業医に届けたら、1件1両の報酬を与えている。日本人については日本居留民団が患者予防に徹しているが、毎年の患者数は日本内地や上海在留の外人よりもはるかに多いのを見て心配している。

また、中国人一般の公德心が薄弱なのは驚くほどで、患者の不正診断書、死亡届書を開業医が簡単に発行しているので、患者の死者数は一部だけしかわからない。工部局は「避病院」、「衛生試験所」を設置して消毒やネズミの捕獲をしているが、住民の大部分は支那人で、各国人も雑居しているため、行政は統一されず、とくに防疫の予防執行は困難だ。悪疫が流行しても詳細の把握ができない。大正8年のコレラ大流行を同9年、10年まで流行させてしまった失態もある。

居留外の人口は全上海の 4 割を占め、比較的下層の支那人の密集生活者が多い。支那官憲はそこでの衛生状況は放置しており、そのためそこが上海流行病の源泉になっており、それが在留日本人に不安を与え、海外貿易にも支障をきたしているのではなはだ遺憾だ。このように租界外には悪疫の流行を見るが、租界内はペストやマラリア対策、清掃の徹底、下水の清掃などを徹底しているため、比較的安全な状態だ。⁵⁾

と生々しくその実情を紹介している。最後に租界の内は安全な方だが、租界の外は悪疫の流行が見られるとしている。しかし、書院が開設立地した場所は、まさに租界の外であったことだ。書院はその後の校舎建設も現地の人たちとの交わりができるように一貫して租界外での立地を貫いた。

(2) 共同租界における工部局の記録

一方、租界を総合的に管理経営していた工部局側のデータと記事⁶⁾を散見すると、21 世紀当初の書院が開設立地した頃の租界の状況は次のように描かれている。

「工部局に隣接する位置に衛生局があり、伝染病研究のために各種実験用の動物を飼育し、また分析実験室も備えていた。牛痘菌は無料で施し、検印のない肉は市場へ出させず、牛乳も支那人の取り扱い分は不良品が多く、要注意である。また、支那人の 4 分の 1 は肺病で、特に肺結核者との交際は注意が必要で、特に若者はより交際時に相手への注意を怠ってはならない。したがって、1 に看病、2 に薬、3 にとにかく病氣

にかからないことだ。

伝染業の種類は、天然痘、コレラ、しょう紅熱、脚気、チフス、赤痢、麻疹、ジフテリア、肺結核、デング熱、ライ病、梅毒、麻病、下疳、と多様で、12 月には天然痘が急増するため、工部局衛生係は各病院へも種痘を提供し、その勢いを抑え込んできた。

(そして各病気の動静を説明した後、)しかし、ほとんど衛生に無知で、路上に痰を平気で吐くような支那人を説得する労は大変なことで、彼らが列強と肩を並べようとするなら、その無知や行動をまずは正すべきだとしている。

なお、工部局は医院を設けており、その規模は大きく立派で、消毒は徹底している。支那人用には工部局華人病院と称し、明治 37 年に落成した。洋人の入院料は 1 室 1 人 1 日 6 両、同室者は 2 両。一方、支那人は 1 ～4 両となっている。⁷⁾

表 1 は、年代別の居留者数と、そのうちの死亡者および死亡率を示したものである。

それによると、居留人口は 1880 年から 24 年間に 4.5 倍にふえ、死亡者数もそれにつれて 2 倍ほどの増加を示すが、人口の増加率に対して死亡数の増加率は低下している。それは死亡率の変化にも表れ、24 年間に半減している。それは中国人もなおレベルは高いものの同様な動きが想定される。この間の工部局の衛生政策がそれなりに成果を示したものである。また、表 2 は、その後の 1925 年のデータで、英米管理の共同租界における国別の人口と志望者、死亡率を示した。最も人口が多いのは日本で、次いでイギリス、ロシア、アメリカの順であ

表 1 イギリス、アメリカ両租界内の外国人死亡者数及び死亡率

年次	居留人口	死亡者数	死亡率
1880	2,195	55	2.5%
1885	3,674	71	1.9%
1890	3,821	91	2.4%
1895	4,684	80	1.7%
1900	6,774	97	1.4%
1904	9,000	116	1.3%

ちなみに中国人は 1904 年、人口 385,000 人、死亡者数 9,956 人、死亡率 1.9% (遠山影直 (1907) 『上海、Shanghai』、遠山刊⁸より)

表 2 共同租界における各国人の在留者と死亡数 (1925 年) (注 6 より筆者作成)

国籍	人口	死亡者数	千人比率
アメリカ	1,943	30	15.44
イギリス	5,879	68	11.57
インド	1,154	44	38.13
日本	13,804	227	16.44
オランダ	1,391	25	17.97
ロシア	2,766	44	15.91
他	2,929	42	14.34
合計	29,866	480	16.07

る。しかし、死亡率はインド人を除けば、最も低いイギリスが目立つほかはほとんど差がなく、この頃は、共同租界が基盤整備も進み、医療環境も平準化して、住民はその恩恵を平等的に受けていたことがわかる。ただし、表 2 に示した 20 世紀に入って死亡率が 1.2 パーセントにまで下がった点からすると、少し増加が見られるが、それはこの間の流入人口が 3 倍に増えており、それが基盤整備の若干の遅れを示したものと思われる。

そしてそれより前のそのような動きの当初、1901 年、東亜同文書院が、上海市街南方の高昌廟に開設された。

4. 東亜同文書院の衛生環境の変化

そこでここでは書院の衛生環境をうかがい知るために、各期の書院生の記録の中からそれに関する部分を抽出して検討してみる。

(1) 第 1 期生の記録から

「医療方面は週 1 回篠崎医師が来た。けれども環境が良くないので、よく病人が出た。そのうち長江赤痢の流行、コレラ患者も出て、学生中に死亡者も 2、3 出た。その上、暑中休暇になっても、帰国が許されぬばかりか、2 時間ずつ毎日語学授業をやることになったので、不平不満が強くなってきた。年配者の間ではとくに激しく、春日寿文(長野県、のち代議士)、村井(滋賀県)が主になって書院改革の烽火を挙げた⁹」

以上は、1901 年入学の第 1 期生の記録である。さっそくよく病人が出たとある。書院生にとっての慣れない初の上海の地は、夏の暑さと湿気による南部の広東と並ぶ、瘴癘の地として知られていた。そのような中で赤痢やコレラに書院生が罹患し、数人の死者が出たことは書院生にとって大きな出来事であったことは間違いない。瘴癘の地としての認識は先行した日清貿易研究所時代にもあり。経験があつたにもかかわらず、それが十分に伝わらず、対応しきれなかったと思われる。それゆえ蒸し暑さの中での夏季休暇中の授業は、書院側の思いとは逆に、瘴癘の地の初体験となった書院生たちには耐えがたい結果をもたらしたということであろう。

そのような中で、書院側の対応は、虹口地区からの週 1 度の篠崎医師の来診であつ

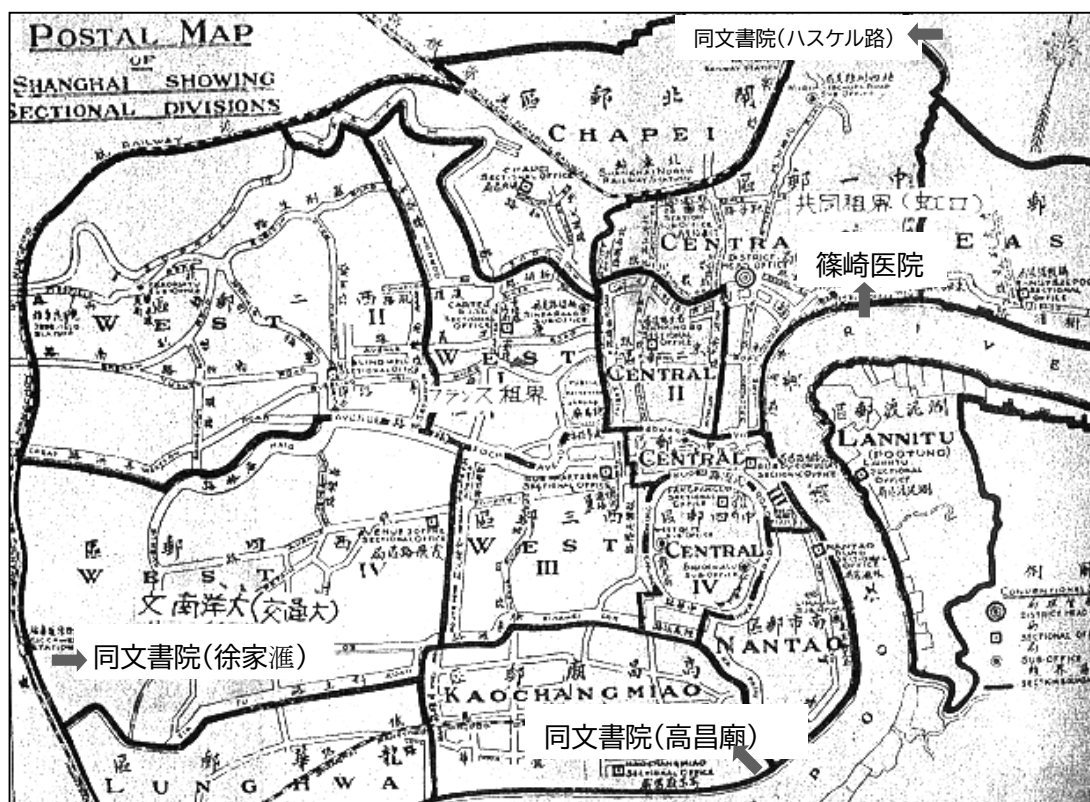


図 3 当時の上海概念図（市街と黄浦江）篠崎医院の位置（郵政絵地図に筆者注記）

た。篠崎医師は当時の上海にあって、日本人の上海への来住が増える中、日本人居留民にたいしての貴重な存在であった。患者は書院生だけではなかったからである。しかし、篠崎医院は、日本人が集中するようになった上海市街地の北方にある虹口地区にあり、市街地の南方にある高昌廟の書院までは、もっとも遠距離に位置した。交通も不便な当時、その往来は大変であったものと思われ、緊急時の来院は間に合わなかったことであろう。このことから当時の書院の医療環境は厳しかったことがわかる（図 3）。

（2）第 2 期生の記録から

「病気そのほかで第 3 期生として卒業した者」になったとして、政治科 2 名、商務科 6 名、さらに第 6 期生として卒業した者 1

名が挙げられている¹⁰。

彼らは病気で遅れた卒業であったが、彼らはのちに大日本製糖、東京日日新聞、朝鮮銀行、郵政省で、また中退者も正金銀行、戦後はインド大使として活躍したとフォローされている。病気が在学期間を引き延ばして留年せざるをえなくなった実態も浮かび上がってくる。

（3）第 3 期生の記録から

皆で大皿をつつく食堂での食事の仕方に慣れず、戸惑ったうえで、「食堂の不潔、廚子の汚い服装が気になった。病院薬局の設備も不完全で校医は時々欠員となり、薬局員も無資格の学生（校員）で間に合わせていた。病気は脚氣が一番多く、新入生のほとんど半分はやられ、衝心で亡くなったものもあり、チブス、赤痢、腹膜炎、盲腸炎、

胃腸カタルなど患者が絶えず、したがって、死亡率も高く、入学当時 90 余名のものが卒業の時は 60 余名となった。のちに篠崎病院長が週 2 回来てくれた。¹¹⁾

この一文には衝撃を受ける。最大の病気は脚気だと断定するくらいに脚が膨らみ、書院 1 年生はやられた。それは当時の日本陸軍と同様で、時の森鷗外陸軍軍医のトップと東京帝大医学部学者の白米食への頑固な信仰がもたらした病気であった。これにより戦場で戦う前に 25 万人もの兵士が病気になったり命を落としたとされる。一方、それに対して海軍はいち早く麦飯を導入し、カレーライスも加え。この災いから逃れた。高木兼寛海軍軍医総監の経験的見識によるものであった。その発端は囚人たちには脚気が発生していなかった実地検分からヒントを得たという。この当時、書院は日本陸軍の食事内容に依拠していたということになる。脚気になり故郷へ帰国するものもあったという。そのほか多くの病気は、異国の気候風土にまだ日本人は陸軍以下対応できず、不勉強であったというに尽きる。高邁な思想、哲学、文学、政治、戦略、勉強も、この場合、白米中心の食事には勝てなかったということになる。改めて組織の指導者たちの指導の頑固さと狭隘な知的偏見には理不尽さがあった。この時の書院も書院外のその環境に振り回されていたということになる。

(4) 第 6 期生の記録から

「我々が桂墅里の東亜同文書院に到着したとき、小汚い支那学舎に入れられた時には少々予想とは大分へだたりがあり、あまり

芳ばしい気持ちにはなれなかった。ことに上海といってもここは全く郊外で水田の水も濁っておれば、電灯もまだ来ておらず、大きなランプであった。日本の昔の寺子屋といった感じであった。ここから対清経営の逸材が出るのかと、清国派遣留学生と言われた我々も聊か心細かった。そして入学後 1 か月もたたないうちに某君が病死して、遠方の日本人墓地に埋葬された。その時森寮監が読まれた切々たる弔辞は我々の胸に迫るものがあり、その時、中学を出たばかりの若者たちは初めて禹域万里に遊学したのだということを初めて実感したのである。ホームシックで 2、3 名帰国したかと思う。

しかし、この最初の悲劇に洗礼を受けたわれわれは、日ごとに落ち着いて 1、2 年後には待望の支那奥地大旅行にでるという程、この支那になじんできた。これ実に教育の影響と環境の然らしむところ、まったく驚嘆のほかはない。翌明治 40 年 4 月の浙江杭州旅行は支那趣味を満喫した。

次いで、その夏、大部分は夏休みで帰国したが、数 10 名のものは学校に残留していた。ところがその年は生憎猛烈なコレラが襲来して 4、5 名が斃死し、残りは遠く長崎へ避難し、休暇も 1 か月延期となった。そんなわけで 6 期生は卒業するまでに 10 余名の物故者を出し、42 年 6 月に愈々卒業した者は 80 余名に過ぎなかった(注——入学者は 92 名)。

しかし、その後、同期生の間にあまり黒枠が少ないのは、まったく優生学上の必然的現象だろうと思っている。¹²⁾

以上、第 6 期生は入学早々一人の学生が病死し、それが全員に緊張感と注意をもた

らしたようで、順調な学生生活を全うできるかに見えたが、夏から 10 月にかけて上海地方を襲ったコレラの影響で、寮にとどまった寮生は長崎へ避難するほどで、結局 10 名あまりの仲間を失っている。コレラはまさに環境問題であり、10 月には書院側は全学生の外出を禁止している。

第 6 期生のこの危機を乗り越えた仲間はその後長命であつたらしく、環境に適応したとみなし、優生学上の体験を述べているのは、コレラ禍が大変な体験であつたということであろう。

(5) 第 13 期生の記録

「2 か月たつて我々は上海へ渡り、ハスケル路の仮校舎に収容された。四囲は英、米、ポルトギー人の住宅だった、朝起きるとすぐ華語の音読が一斉に始まる。(中略)

日本を離れ上海へ渡ると一遍に気が荒む。おまけに気候が悪い。病人が絶えない。

あたは青雲を抱いて有為の青年が喪われる。葬いには一包の干菓子が配られた、また今日も包一包かと寂しい嘆声が出る。上級生いや同級生でも酒豪は寮廻りをして鬱勃たる青春を紛らわせている。(中略) 大村校舎の生活はわずかに 2 か月ではあつたが、病人はほとんど出なかつたが、上海では病院がすぐ満員になった。かくて岸川、石川、樋口(正)、植村、国分、山内などの諸君を在学中に失つたことは痛恨に堪えない。これらをよく看とつてくださった品川賢齊校医も一通りの苦心ではなかつたかと思う。¹³⁾

大正 2 年(1913) 7 月、設立後 10 年を経て、いよいよさらなる発展を期していた書

院は、東側に隣接していた清国が建設した江南機器局をめぐる清国滅亡直後の第 2 革命の南北両軍による争奪戦の中で兵火を浴び、高昌廟の校舎を失つた。そのため、東京で入学式を終えた 13 期生は書院が用意した長崎県大村の 2 寺院のうち正法寺本堂の仮校舎へ入つた。根津院長は病のため伊豆で療養中であつたが、悲報を知り、書院をつぶせないとすぐ上京し、新たな校舎の確保に奔走した。そして 10 月には上海北部の虹口地区の租界に北接するハスケル路に新たな仮校舎を確保した。フランス人が経営していた倉庫の改装利用であつた。前掲記録中の大村校舎とハスケル路校舎は以上のような経過の中で誕生した。第 13 期生は入学と同時にいきなり長崎県大村の寺に入り、2 か月後にはハスケル路の倉庫跡の仮校舎に入つたため、描いていた書院のイメージがつぶれ、記録文にあるように気分は荒れたということであろう。医療環境も整わない中、上海へ渡つたとたんに書院生の仲間が次々に亡くなる状況に堪えがたかつた思いと行動が描かれ、寮監の先生も手がつけられなかつたとも付記している。

ただ、そのような中、品川校医が苦心されたと記録されている。品川校医は高昌廟の校舎時代、明治 40 年(1907) 5 月に初めての専任校医として赴任した。翌年の校舎の平面図によれば、校舎の 2 階に住まいと 2 部屋の病室、階下に医局と 2 つの診察室が、いずれも小規模ながら配置されている¹⁴⁾。

(6) 第 15 期生の記録

「ハスケル路時代には幾多の春秋に富む学

生を亡くしている。おもにチブスであったが、校内が極めて不潔であったので、病菌などがはびこり、身体の弱いものは侵されたら再起できなかったのである。当時の事情としてはやむを得なかったが、じつに惜しいことをしたものである。

2年の時に、徐家滙の新校舎に移転した。(中略) 新校舎はさすがに立派であった。郊外で空気もよく、町の雑音も聞こえずによかった。また、寄宿舎や食堂も設備がよくなったので、ハスケル路時代の寮廻りや煮一煮もだんだん衰えた。2年ともなれば、勉強が長期にならざるを得ず、(中略)

3年間に亡くなったものも多かったが、卒業した数は72名(うち商務科60名、政治科2名、農工科第1部7名、同2部3名)であった。大正7、8年は好景気の絶頂で、買えば儲かる時代であったが、同9年に至りドイツの形成悪くなり、ついには連合軍に屈服するに至ったので、欧州からの注文は途絶し、商品は暴落する一方であったから、内地の経済界は混乱した。そこへまた、大正12年の関東大震災があったので、この打撃は大きく、会社、銀行の破綻する者も出始め、昭和2年の春には鈴木商店、他一流の会社がつぶれたので、ここに非常な不景気に見舞われた。¹⁵⁾

つづくハスケル路時代もやはり病気が多く発生した。記録者は仮校舎の不潔のせいだとしている。とくにこの時期もチブスと脚気が書院生を襲った。無事卒業した書院生は72名であったが、当初の入学生は102名であった。30名が在学中に病気などで姿を消しており、特にハスケル路時代の衛生環境は厳しかったことがわかる。前校舎の

突然の兵火により校舎を放棄せざるを得ず、入学生や在校生、それに大旅行中の最上級の3年生も帰校するという緊迫した状況下での根津院長らによる緊急の仮校舎探しは大変であった。こうして確保した上海北端ハスケル路の仮校舎は、倉庫の跡で狭く、しかも新設の農工科も加わり、根津院長は早くも新校舎建設に動き出し、各地に結成されていた同窓会をめぐり寄付金の募集も始めることになった。しかも新校舎建設は建設時にトラブルがあったが、それを乗り越え、フランス租界西端の外側に、のちに名を成す名建築家の桑野藤三郎の手で建設完成した(大正6年、1917)。しかもそれは隣接するフランス租界や南洋大学の建物群に負けない瀟灑な建物群で、その後上海の名建築絵葉書の中でも名をはせた。

記録者が新キャンパスの環境も建物も気に入っていることが伝わってくる。

(7) 第17期生の記録

「入学後数か月たつと脚気や腸チブスにかかるものがあり、チブスでは2、3人の同学が死亡した。講堂で行われた葬式には、上海市内の本願寺のお坊さんが来て、「朝に紅顔あって、夕に白骨」のお経本が読まれ、式後、干菓子の包一包が各室に配られて、「包一包」となった学友の異域における死を悲しんだ。

だが、その後、チブスは予防注射で、脚気は玄米食でほとんどなくなったのは幸いなことだった。¹⁶⁾

この17期生は、当初まだ書院生の脚気やチブスがはやる中にいた。学友が「包一包」に変わってしまったことに、わが身を重ね、

病気への緊張感を常に抱いていたことが伝わってくる。

それが後半になって、ようやく予防注射と玄米食への転換で、書院の二大病を克服できそうな状況になり、喜んでいることがうかがえる。初めて流行病からの解放が現実になった喜びである。それにしても時間がかかった。とくに書院の食事にどのようなきっかけで玄米食が取り入れられたかについては関心があるが、結果から見ると遅かった。陸軍の銀シャリ飯方式から抜け出せなかったのである。

(8) 第 19 期生の記録

「我々同期生は、入学から卒業まで、一人の死者も出さぬという書院始まって以来の記録を作った。それまでは、年々脚気とチブスのために何人かの犠牲者が出たものである。その対策の一つとして半つき米を常食することになり、3 年間これを実行した。そのため脚気患者が皆無になったことは確かである。チブスの注射も東京以来よくやった。暴飲暴食は止めるものもなし、元気に任せて金のあるかぎり、付けの利く限りやり、摂生方面で注意したというようなこともないが、不思議に健康と運に恵まれて、同期生の葬式を一度も出さなかったことは持って珍とするに足るだろう。自慢の 2 は旅行である。11 期と 15 期に大きな旅行班があったが、第 19 期生はそれにも勝る旅行班がいくつもでき、それこそ四百余州をあまねく歩きまわったのである。

三年生最後の 20 期生ともしばらく同学し、新旧三年生と生活をともにしたのもまた私共だけである。初めて学生ホールができ、図書館、病院とつぎつぎに新しい書院

が形作られ、南北西寮のほか設備の整った新寮の増設を見、一方運動面にも卓球部、乗馬部などが生まれ、文芸部でも機関誌「江南」のほかに、斬新な編集を誇る「断層」が発行され、若人の心に時代の流れを注入したものであった。(以下 略) 17」

第 17 期生にその予兆が記されたが、ついに 19 期生になって、書院生を襲ってきていた二大病気がほぼ払しょくされたことが、記録者によって高らかに宣言されている。そして入学から卒業まで一人の死亡者も出さなかったという新記録が誕生したとも、高らかに宣言している。まさに病気のない夢の世界にこぎつけたのである。しかし、それは遅ればせで残念であったが、脚気は白米主義をやめた食材の改善と、チブスは予防注射の普及の恩恵であった。それを実現させたのは徐家滙への移転による全く新しい新校舎とキャンパスの完成があった。汚いとされ、患者をいつも生み出していたハスケル路校舎からの脱出を目指した根津院長の熱意と采配が大きかった

その徐家滙での新校舎は、大正 6 年 (1917)、虹橋路 100 号地に次のように完成した。

5. 徐家滙虹橋路校舎の完成と付属病院の完成

この新校舎は、それまで狭隘なハスケル路の仮校舎から全面移転すべく計画、完成された。繰り返すが、移転した場所は、当時の上海西郊の徐家滙天主堂近くで、東隣は南洋大学（現在の上海交通大学）とフランス租界との境であった。ここに新校舎は 3 年の年月をかけて大正 6 年に完成した。

その敷地面積は 3.3 万平方メートル。こ

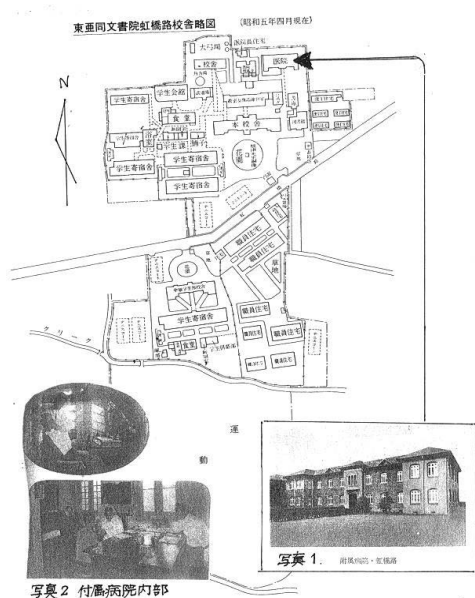


図4 新設された附属病院の位置（滙友会（1982）『東亜同文書院大学』より）

ここに本館、講堂、事務室、研究室、図書室、教室、農工科研究実験室、学生寄宿舍、大食堂、学生クラブ、大浴場、そして医局ができ、中央の道路を挟んだ向かい側には教職員住宅、クラブ棟などもできた。この段階では、図書や病院は独立棟ではなく、病院も建物の一角に医局レベルとして留まっていた。

そこで書院当局は施設をさらに拡充充実させるために、大正12年（1923）、新たに学生会館、図書館、そして病院棟を完成させた（キャンパスの東北端）。

病院棟はコンクリート棟二階建て、137坪（写真1参照）、一階には診察室、調剤室、外科室、顕微鏡室、歯科室、患者控室、事務室が置かれ、二階には病室及び看護婦室が置かれ（写真2参照）、立派な書院附属病院棟が誕生した。これらの建物は新設であり、そのために本館背後の東北部分の土地を新たに購入した¹⁸（図4参照）。

そしてこの病院に校医として就任したの

が金子元春であった。金子は大正4年に京都府立医科大学卒業、そののち同附属病院に勤めた後、書院の校医として赴任した。ちょうど書院のこの新病院が完成した時期で、以後7年間勤務した。帰国後は故郷の埼玉県皆野町で医院を開業し、結核の治療に力を注いだ。なお、書院の校医時代に育った息子の金子兜太は、東京帝大から日銀勤務ののち詩人として名声を博したことはよく知られている。

この金子校医は、新校舎完成の時期とほぼ同期に書院へ赴任しており、当初は新装なった医局、大正12年には附属病院が完成し、医療環境は各段に整備された状況で勤務できた。そんな金子校医についての書院生の記録は、第19期生（大正8年入学）の記録の中に次のようにみられる。

その高沢は万年筆をはじめて見たほどの山家育ち。入学早々首に腫れもののできたのを上級性に「そらヨコネだ、医局に行ってすぐ切ってもらえ」と言われ、先生ヨコネを切ってくださいと首を出し、金子先生に馬鹿野郎を一かつされた愉快的話もある。¹⁹

というくだりであり、金子校医と書院生たちの安心した親しい関係がうかがわれる。

いずれにせよ、こうして19期生からは、前述したように流行病のうち書院生にとって最大の脚気と腸チブスの病気が姿を消し、書院生にも書院側にとってもやっと訪れた安心できる平穏の日々を確保できるようになった。この徐家滙の新校舎は、そのような環境の安定化もあって、このあと約20年間、第二次上海事変で校舎が焼失されるま

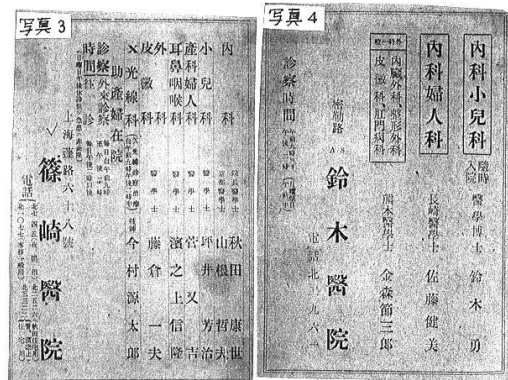
で、書院史の中でも大旅行をはじめ、研究、教育、クラブ活動、就職など最高のゴールデンエイジを迎えることになる。この段階で病気の克服がもたらした価値は書院にとってきわめて大きかったのである。金子校医はそのような平穏期になってから、書院に勤務できたのは幸せだったに違いない。

しかし、昭和3年(1926)の10月には、そのすきを突かれたように書院内で急性の腸炎が発生伝染し、100名以上の急患が出ている。急遽3教室を病室にし、期末試験を延期したほどであった。病状も憂慮するほどの事態となったが、校医はじめ関係者の懸命の看護施療により、危機を脱している²⁰。金子医師が交代した後の出来事であった。原因については明らかではないが、附属病院ができたことへの安心感からくる油断と、書院キャンパス周辺への都市化の波による環境変化への対応の遅れがあったのであろう。

6. 上海における医療環境の整備

このような書院における医療環境の整備は、上海自体の街における医療環境の整備にも表れた。少し、本筋からは少し離れるが、書院にも関係して上海の医療環境の状況にも触れておく。

すでに日本人の上海移住開始とともに、

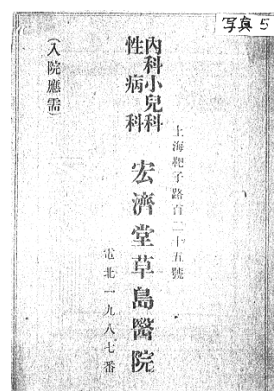


当初の日本人そして書院生の医療を支えた篠崎病院が虹口地区に開設されていたが、さらに日本人の移住者が増え、昭和2年刊の『上海案内、

第11版』に掲載された「篠崎病院」の広告によれば、かつての篠崎院長による個人病院は各専門医が担当する7科を持つ総合病院へと発展しており、上海を代表する邦人病院とし

て展開していることがうかがわれる（写真3）。また、そのほかの病院では3人の各専門医が広くカバーする「鈴木医院」（写真4）や、専門分野の診療科目に特化した「宏済堂草島医院」（写真5）なども見られ、日本人の医療環境を広く支えるようになったことがわかる。一方、次第に租界に住む外国人も増え、さらに中国人も流入する中で、租界の工部局が運営する「避病院」は上海の伝染病を広くカバーし、医師が必要と認めた場合は入院が認められ、入院移送費や診断、治療費は無料であった。同病院は日本人用にも配慮され、日本人看護婦2名が配置された。この手厚い対応に対して日本人居留民団は俸給の半額を負担したという。

そのような状況下、大正末期には、日本人医師の手で斬新な病院が建設された。それが同じく虹日地区の北四川路に大正 12



年（1924）開設された上海最大の「福民病院」であった²¹。その規模は、地上7階、地下1階の鉄筋コンクリート造り（写真6）で、エレベーターも完備された近代的な最新病院であった。診療部門も外科、内科、泌尿科、小児科、婦人科、歯科、眼科、耳鼻咽喉科、レントゲン科などがそろそろ文字通りの総合病院の形をとった。

この総合病院の開設者は頓宮寛（1884～1974）。東京帝大医学部卒業の後、中国湖北省の鉄鋼会社の医院長を務め、そのあと、この病院を設立した。勤務した医師は日本人のみならず、イギリス人、ドイツ人、ロシア人など国際的で、総職員数は200余名に上った。租界に立地した国際都市にふさわしい国際病院の特性が打ちだされた。

頓宮の設立趣旨は、コスモポリタンとして人種の壁をなくすことにあった。したがって、患者は中国人、欧米人、そして日本人で、日本人よりも外国人の間でのほうが有名になった。上海の租界でさらに画期的な医療環境を日本人が支えたのである。

なお、太平洋戦争終了後は、この病院は中国側に接收され、市民病院や人民病院と改名利用されたが、虹口地区では長く総合病院としてその役割を果たした。

7. おわりに

以上、1901年に当時の清国上海へ進出し、日本人の日清間の貿易実務者の養成を目指したビジネススクールとして東亜同文書院が開設された。大陸での新たな交流とビジネスの夢を抱き、県費生制度によって各府県から選抜された優れた書院生が集い、研鑽し、戦前はもちろん、戦後も国内のみならず、新たな国際舞台でその実力の本領を

発揮した多くの卒業生たちを生んだ²²。それは敗戦後に日本経済の復興と発展の大きなけん引役を果たした。

そのような栄光の歴史の一方で、当初、書院が立地した上海は瘴癘の地と称されたように、その風土性と不安定な政治的社会的基盤から、劣悪な環境基盤の上にあった。それは租界外に立地した書院生の生活にももろに影響した。折から書院立地直前の義和団の乱による清国民衆の上海集中による混乱、第二革命による校舎の消失、急遽確保したハスケル路の狭隘な校舎、などの状況はいわば想定外の出来事であり、そのような中での書院の存続と教育は奇跡に近かったといえる。かつて同じく進出を試み、断念した他の学校の事例を見ても、書院がそれをクリアできたのは、根津院長の荒尾精、さらには近衛篤磨公から継承した日中関係の発展への強い志であったといえる。

しかし、劣悪な環境を熱意だけではクリアできるものではなく、それは上海で生活し始めた書院生に病気という形で現れた。すでに書院の前身で1890年に同じく上海に開学した日清貿易研究所においても同様な状況が発生していた。それを積極的にクリアする手立てはなく、劣悪な環境に身をゆだねるしかなかったものと思われる。前述した第6期生が、猛烈なコレラ禍で多くの同期生がなくなった中で、それを生き抜いた書院生に優生学上の必然性があったとまで記録した状況は、それを示している。異国の地、それも上海のような瘴癘の地で日本人が生きることには、当時大きな覚悟も伴ったということである。

ところで、当時、書院生が脚気で病気になり、命も失ったことは、日本陸軍が戦う

前に 25 万人も兵士たちを脚気の病気やそれによる命を失わせた状況と類似する。これは日本陸軍の軍医総監であった森鷗外と森を支持した東京帝国大学医学部教授たちが兵士たちへの銀シャリ食事にこだわったことによる惨事であり、また当時の書院もその方針に乗っていたことの結果であり、劣悪な上海の衛生環境が直接もたらしたものでなかった。病理が解明できない中で妄信のなせる業であった。のちの陸軍と同様、書院も銀シャリの白米を胚芽米や麦飯の導入で、第 19 期生の記録にあるように、脚気は書院から姿を消したのである。その点では、書院の前半期に書院生の上海への渡航後に多発し、書院生を悩ませ、死ももたらせた脚気については、日本政府や学会関係者トップの知的偏見と強引さによる影響であったといえる。

しかし、腸チブスや赤痢及び他の多様な病気などは上海の劣悪な環境の影響であった。根津院長による徐家匯への新校舎建設とそれに続く附属病院の開設整備は、まさにそれ以降の上海の不衛生環境への挑戦であり、それでも一時的に学内に伝染病が入り込むことはあったが、全体としては書院生を病気から守る画期的な環境を作り出したといえる。それがそれ以降の約 20 年間、書院の全盛期をもたらしたのである。

なお、上海租界のその後の人口増加などにみられる発展は、同時に不衛生環境がもたらす病気の増加ももたらした、そのような中で租界を経営する工部局はかなり尽力して住民に対する衛生の啓蒙活動を行い、専属の避病院は病人を積極的に受け入れた。また虹口地区中心の日本人による病院も、専門分野を広げた総合病院や専門分野への

特化の病院も見られ、さらに「福民病院」のような全民族に門戸を広げた国際都市上海にふさわしい国際的病院さえ日本人の手で誕生した。それらの病院の拡充整備は上海の医療環境全体を底上げし、それは書院の附属病院へも連動していたに違いない。その裏付けは一つの研究課題である。

【付記】

当レポートは、2019 年 7 月 18 日、愛知大学東京事務所へ、かつて書院の校医であった金子元春氏のお孫さんである金子桃刀氏を迎えし、「金子・愛知大学両家交流会」を開催したときに、そこで発表した内容を骨子にしている。金子桃刀医院長、また同会を主宰された小川悟氏には厚くお礼申し上げる。なお、当日はほかに兜太・産土の会の根岸氏、産経新聞喜多由浩氏、松下哲夫氏、愛大同窓会関東各支部の中川善弘、中島寛司氏、高井和伸氏、他の皆さんの出席を得、色々ご意見をいただいた。また、文中の「福民病院」については、養祖父が第二代東亜同文会幹事であった佐藤恭彦氏からご教示をいただいた。

本研究は令和 2 年度度の文部省科学研究費の一部を使用したことも付記し、あわせてお礼申し上げます。

¹ 干満の差が大きい西ヨーロッパの海岸や東シナ海では、一般に港は築けない。そこで海へ流れ込む河川沿いに掘割港、ドックを作り、干潮時には閘門を占めて、船は荷物の上げ下げを行う。典型的なのがイギリステムズ川河口のドックランド

で、たくさんのドックと倉庫が集中立地した。近年の航空による荷物の輸送が多くなり、船舶の役割が減少する中、ロンドンのドックランドは、ロンドンオリンピックの時ドックが埋め立てられ、スポーツ会場やその関連施設に生まれ変わった。

- ² 1985 年のデータ。『上海統計年鑑』1986 年版、17 頁。
- ³ 同上。
- ⁴ 杉江房造 (1927) 『第 11 版 上海案内』日本堂書店。
- ⁵ 同書、58～59 頁。
- ⁶ 遠山景直 (1907) 『上海、Shanghai』国文社、93～74 頁
- ⁷ 同書、78 頁。
- ⁸ 同注 6。
- ⁹ 滬友会 (1982) 『東亜同文書院大学史：創立八十周年記念誌』、399 頁。滬友会 (1955) 『東亜同文書院大学史』、173 頁。
- ¹⁰ 滬友会 (1982)、403 頁。
- ¹¹ 滬友会 (1982)、419 頁。滬友会 (1955)、101 頁。
- ¹² 滬友会 (1982)、418 頁。
- ¹³ 同書、440～441 頁。
- ¹⁴ 同書、441 頁。
- ¹⁵ 滬友会 (1982)、447。滬友会 (1955)、206 頁。
- ¹⁶ 滬友会 (1982)、457 頁。
- ¹⁷ 同書、468～461 頁。
- ¹⁸ 滬友会 (1982)。
- ¹⁹ 滬友会 (1955)、217 頁。
- ²⁰ 滬友会 (1982)、127 頁。
- ²¹ 南部英二 (2010) 『奇跡の医師——東洋位置の個人総合病院・上海・福民病院を作

った慈愛の業——』光人社、397 頁。

- ²² 藤田佳久編 (2020) 『東亜同文書院卒業生の軌跡を追う』あるむ、302 頁。